

◆連載-Vol.29

# 現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



## 執筆者プロフィール

**中谷 正人** (なかたに・まさと)  
1948年神奈川県生まれ。1971年千葉大学建築学科卒業、『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994年からフリー編集者。1999年～2014年千葉大学客員教授。

## モダニズムの向こうへ その3

### 戦後建築教育の開花

1928年生まれ、建築家は菊竹清訓、榎文彦、林昌二、林雅子などをはじめ、これからも語り継がれるであろう建築家の数は多いが、そのうちの何人かを紹介しよう。

### 岡田新一

1969年に募集された「最高裁判所」(1974)の設計コンペで選ばれた岡田だが、応募当時は鹿島建設の設計部に所属していた。ところが設計者が関係する企業は施工に参加できない応募規定があり、これを機会に独立。その後、刑事物のテレビ番組では必ず出てくる東京桜田門の「警視庁本部庁舎」を始め、「北海道立三好好太郎美術館」(1967)、「日本歯科大学新潟歯学部」(1972)、「岡山市立オリエント美術館」(1979)、「岡山県立美術館」(1988)、「宮崎県立美術館」(1994)など、数多くの公共建築の設計に携わった。

「岡山市立オリエント美術館」は、RCの内壁を全面的に小叩き仕上げとして、ソフトな空間となっているのだが、施工中に精度が悪いとの理由で3回も打ち直しをさせたという話を現場で聞いた。また、「日本歯科大学新潟歯学部」のデザインは、山下和正が青山に設計した「From 1st」(1975)に影響を与えたともいう。

### 池原義郎

1953年に早稲田大を修了後、山下寿郎建築設計事務所を経て、1956年には早稲田大学にいったん戻って今井兼次研究

室の助手、その後多摩美術大学講師を経て、1965年から早稲田大学専任講師、助教授、教授へと進んだ。

今井が設計した長野県安曇野市の「碌山美術館」(1958)や長崎市の「日本二十六聖人殉教記念館」(1962)などでは、デザイン・チーフ的な役割を果たした。また、多くの後進を育てるとともに埼玉県所沢市の「所沢聖地霊園・礼拝堂・納骨堂」(1973)や「西武ライオンズ球場」(1979)、石川県能美市の「浅蔵五十吉美術館」(1994)などをはじめ住宅や公共建築に多数の作品を残した。

撮影にあたっては超広角レンズではなく、標準レンズで撮るようにとの指示が多かった。おそらく超広角によって空間がデフォルメされてしまうことを嫌ったのであろう。

### 阪田誠造

坂倉順三亡き後、大阪事務所は西澤文隆、東京は阪田が代表となり、西澤が亡くなると全坂倉建築研究所の代表となり、晩年の作品「聖イグナチオ教会」(1999)完成後は最高顧問を務めた。2016年に亡くなったとき、葬儀はこの教会で執り行われた。はたして、そのようになることを阪田は予想していただろうか。また、それが望んでいたことだったのだろうか。今や確かめるすべはないが…。

### 林雅子

旧姓山田雅子で林昌二と結婚して林姓を名乗り、おそらく初めて女性建築家としてその名を知られた人であった。同じ日本女子大学住居学科卒業の山田初江、中原暢子と3人で設計同人を設立したが、いわば3つの事務所が同じ場所で仕事

をする、今でいえばシェアオフィスの走りで、スタッフもそれぞれのポストに所属していた。林雅子は特有の落ち着いたデザインと居住性が評価され、住宅をはじめ高知県土佐清水市にある「海のギャラリー」(1966)など、公共建築などにも多数携わった。

「海のギャラリー」は建物の老朽化によりいったん閉鎖されたが、雅子の没後に林昌二や地元建築家たちの運動で改修にこぎ着け、ふたたび蘇った。林昌二は「雅子への供養です」と語った。

林雅子は住宅の設計を依頼されると、必ず3つの案を施主に見せた。ひとつは自分が納得できた案、もうひとつは施主の言いなりにつくった案。そしてもうひとつはその折衷案である。それぞれ本気で考えているんですかと問うと、自分がこれだと決めた案がいかに良く見えるかを、残りのふたつの案で示すのよ。施主は2案では満足しないし、4つあると迷ってしまう。だから3つがいいの、という答えだった。

そして忘れてはならないのが東京・小石川にある自邸「私たちの家Ⅱ」だ。もともとあった「私たちの家」の建替えて、1階は日常的な住居であるが、2階は別荘として考えていて、ジャグジーの付いた丸いバスタブが用意されていた。別荘であることを強調するように、階段の上部、2階の床から水平に扉を引き出すと、2階が隔離されるようにまできており、休暇状態の時はお客さんが来て出ないとのこと。

台所脇に設けられたカウチに寝そべりながら、「窓の外を見ると自宅の外観が見えるんですよ。これがいいですね」と林昌二が言っていたのを思い出す。

### 奥村昭雄

東京芸術大学を卒業し、吉村順三に師事していた奥村は、石田信男とともに吉村の設備に関する考え方を発展、システム化して「OMソーラー」をつくり上げた。石田は宮脇檀の直接の弟子であり、その意味では吉村の孫弟子にあたるのだが、直接的に吉村の薫陶も受けていた。石田は建築的に何もしなくてもパッシブはできるんだよ。冬の晴れた日なら日中は窓際に黒い布を敷いておけば蓄熱して、寒くなったら熱を自然放射して暖房負荷を減らすことができるの、などと言いながら、都内では一般的な木造モルタルの住宅で、壁に暗褐色のモルタルを塗り、間柱の上下を互い違いに切り欠いて外壁をラジエータ状の集熱板とし、温まって上昇してきた空気を棟の部分に設置したシロッコファンで床下まで強制的に送って屋内を循環させた。電気設備に関するイニシャルコストはシロッコファン1台のみ。これで冬期の暖房コストがだいぶ下がったという。

省エネルギー建築において、奥村が指導的な結愛区割りを果たしたことは間違いないし、木曾三岳の山荘を奥村設計所として、設計活動とともに吉村の家具の制作もしていた。

同年代というだけで彼らの業績をひとまとめにできるはずもないのだが、17歳の多感な年齢で終戦とそれに伴う社会の大転換を体験したことは共通している。そして戦後の文字通り灰燼に帰した主要都市の再建を期して、国としても建築教育に力を注いだ時代でもあった。

そのせいか、的を絞るのに苦勞をするほど個性があり実績も重ねてきたこの年代は、戦後第一次の百花繚乱の世代だといえよう。(続く)



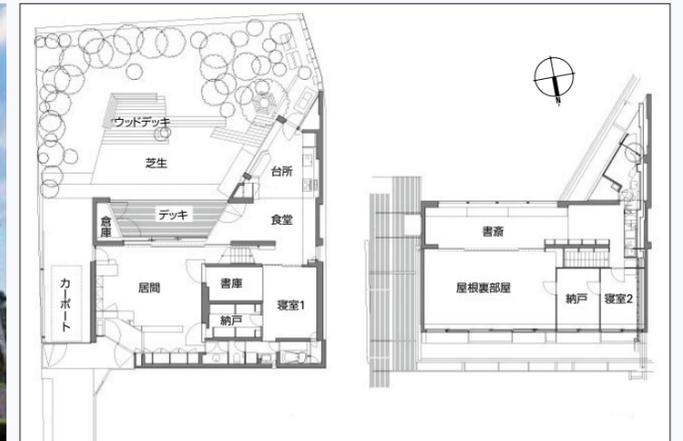
警視庁本部庁舎 出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)



所沢聖地霊園・礼拝堂・納骨堂 出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)



聖イグナチオ教会 photo by Dick Thomas Johnson



私たちの家Ⅱ 平面図